

## 工房私案

— 新「空間造形工房」建築始末 —

### Ueberlegungen zu einem Atelier

Die neue “Space Factory” — Vom Anfang bis zur Vollendung —

望 月 久 也

Hisaya MOCHIZUKI

#### Abstract

Der Aufsatz beginnt mit einer zusammenfassenden Erläuterung des Ursprungs der Bezeichnung “Raum-Atelier (Space Factory)”, des Werdegangs des Baus des neuen Ateliers und der Ueberlegungen dahinter. Es folgt eine genauere Darstellung der bisherigen Ateliers: 1983 hat der Autor in Horinouchi, einem Stadtteil von Hachioji (Tokyo) sein erstes Atelier eingerichtet. Nach ca. 12 Jahren Tätigkeit in einem Atelier in der benachbarten Stadt Hino hat er 1997 in Yasatomachi (Präfektur Ibaraki) das “Raum-Atelier” eingerichtet. Danach wird dargestellt, wie er dazu kam an den Bau eines neuen Ateliers zu denken, wie er während längerer Zeit verschiedene Objekte begutachtete und sich schliesslich im Jahre 2003 fuer ein Grundstueck entschied, das ebenfalls in Yasatocho liegt und ca. 562 Quadratmeter gross ist.

Daraufhin hat er den Architekten Satoru KITAZAWA mit der Planung des Baus beauftragt. Das Ergebnis vieler Besprechung sieht so aus: Es ist ein rechteckiges Gebaeude von ca. 264 Quadratmetern, das Atelier und Wohnung umfasst. Die Werkstaette ist zylinderfoermig und liegt etwas tiefer als der Wohnraum mit Kueche, Wohnzimmer und Schlafzimmer. Der Stahlbau machte Abklaerungen zur Bodenstabilitaet notwendig, die ergaben, dass der Boden stabilisiert werden musste. Nach der Auswahl der Baufirma begann im September 2004 der Bau. Die Gruende, die zur Verzoeigerung der Vollendung fuehrten, werden ebenfalls erlaeutert.

Mit einer zusammenfassenden Betrachtung zur Funktionalitaet des Ateliers in bezug auf Grundflaeche, Hoehe, Form, Lichteinfall und Lueftung schliesst der Aufsatz. (Zwei Skizzen des Gebaeudes sowie zwei Photographien dienen der Veranschaulichung.)

**keywords :** *atelier, fusion of living space and workspace, Space Factory*

## I. はじめに

表題の「空間造形工房」とは一般的な名称ではなく、筆者の工房（アトリエ）の屋号のようなもので、彫刻に限らず広い意味での立体造形を、その存在する空間、あるいは内包する空間を含めて考えたいという意味が込められている。この名称は筆者のオリジナルではなく、文化庁のインターンシップで指導を受けた、彫刻家広井力氏の山梨県にある工房名を、いわば暖簾分けしていただいたものである（英語名 SPACE FACTORY も同様）。具体的には1997年に茨城県八郷町に開設した工房から使用している。

今回、後述するいくつかの理由により、この工房を

立ち退くこととなり、新たに工房を建築した。土地選定から、移転完了までほぼ3年を要し、その間、様々な課題も生じたが、それらへの対処の目安は、筆者の工房に対する考え、ひいては制作に対する考えに拠っている。そこで本稿では、工房建築の過程と、それに伴う諸々の考察を記し、工房についての私案としたい。

## II. 工房設立に関して

学校で美術を学んだ者の多くが、卒業時にぶつかる問題として、それまでの恵まれた制作拠点をどうするかということがある。特に立体の場合は、一定のスペースと設備が必要となり、平面に比べて、制作を続ける条件は厳しくなる。

教員となり、勤務先でやりくりすることも1つの手

段であるが、筆者は当初無謀にも、金属造形のみで生計を立てるつもりでいた。1983年、東京都北区の集合住宅にあった実家を出て、何とか制作のできる場所を探すこととなった。

下町の空き工場などは、小さなものでも家賃が高い。そこで多摩地区を中心にまわってみたが、そもそも「工房アリ」などという物件を不動産屋が扱うことは稀である。人伝に融通が利きそうな所を訪ねるが、使用目的や条件を不信がられ、断られることがほとんどであった。

そのような中、何とか見つけたのが、八王子市堀之内の借家で、大家の老夫婦に頼みこんで、1部屋を工房として使わせてもらえることとなった。金属加工時の騒音や加熱などは通常住宅地では不可能だが、当時の堀之内はまだ辺鄙な所で（京王新線の終点は多摩センターだった）、しかも、家の周囲は2方向が林と墓地のため、昼間の制作であれば何とかなった。6畳間を自分で板の間に改造し、襖や壁を耐火ボードに変え、最低限の工具や設備を少しずつ揃えて最初の工房とした。好都合にも、コンクリートの床に波板屋根つきの物干し場も付いており、材料置き場や屋内では出来ない作業の場となった。

### Ⅲ．新工房建築まで

1995年、当時造園業者の庭先を借りて、10年程使っていた2番目の工房（東京都日野市、築20年のプレハブ）の傷みが激しく、手狭な感じも強まっていたことから、新たな工房を探し始めた。ただ、多摩地区もマンション等が次々に建てられており、思うに任せず1年が過ぎた頃、たまたま作家仲間からの呼び掛けがあり、東京から相当離れるが、筑波山の東麓、茨城県八郷町への移転を決意した。その後96年暮れから、かつて陶芸家が使用していた作業場と窯場を金属彫刻用に大改造して、97年の春、引越しを完了し、「空間造形工房」とした。

しかし、その後5年程で今度は住居部分（築40年）の老朽化が進み、支障を来し始めた。また、20坪の工房も、大型作品の収蔵にかなりのスペースをとられるようになった。対症的な修繕や増改築は難しく、家主の意向もあり、3年を目処に再度新たな工房に向けての模索を開始した。2002年夏のことである。

### Ⅳ．土地探し

今回は年齢的にも、最終的なものにしたいと考え、これまでのような賃貸や既存の物件の改造はやめ、新築を目指してまず土地探しから始めた。

地域としては、加工時の騒音や広い面積の必要性などから予算的にも、既存の居住区域内は無理で、周囲に余裕のある山林などの地目で（農地や調整区域は扱いが難しい）、なおかつ、材料等の調達や作品運搬のための物流や道路が確保され、東京へのアクセスがあまり大変ではない所。土地柄としては、多少なりとも自然が残っていて、工具や作品保全のためにも湿気が少なく、一定の日照が得られる場所を念頭においた。

多くの情報から当時の八郷町内をはじめ、常磐道沿線、さらには東北道、中央道沿線にも足を伸ばしたが、決定的と思われる物件は見つからなかった。この間1年以上を経たが、2003年秋に、家主にたまたま案内された彼の所有地（同町内）に直感が働き、棚田と木立ちに接した土地を170坪余り取得した。

### Ⅴ．設 計

土地を得ると、建物のイメージが具体化し始め、数棟の彫刻工房を改めて見学したうえ、助言をもらった。工房のみの設計であれば、自分で可能と思われたが、今回は居住スペースも伴うため、まずハウスメーカーとログハウス代理店に基本プランをお願いした。しかし、こちらの望む工房のスケールが住宅建築の間尺に合わず断念し、続いて地元の設計士や工務店にも相談したが、なかなかイメージが一致せず、最終的には旧知の建築家にまとめてもらうこととなった。

建築家北澤聡氏は、東京の設計事務所「スペースマシーン」の主宰で、一緒に仕事もしている。今回は彼の優れたデザイン力と、少ない予算で大きな建物を作るという難問をクリアする、豊かな発想力に期待を寄せた。

2004年の年明けに、最初の現場調査と基本プランについての打合せを開始し、その後原案の検討を現地と東京で数回行う中で、特に工房に関する条件を明確にしていた。

### Ⅵ．建築プランの特徴

春までに数案を絞り込み、工房と住居を1棟にまと

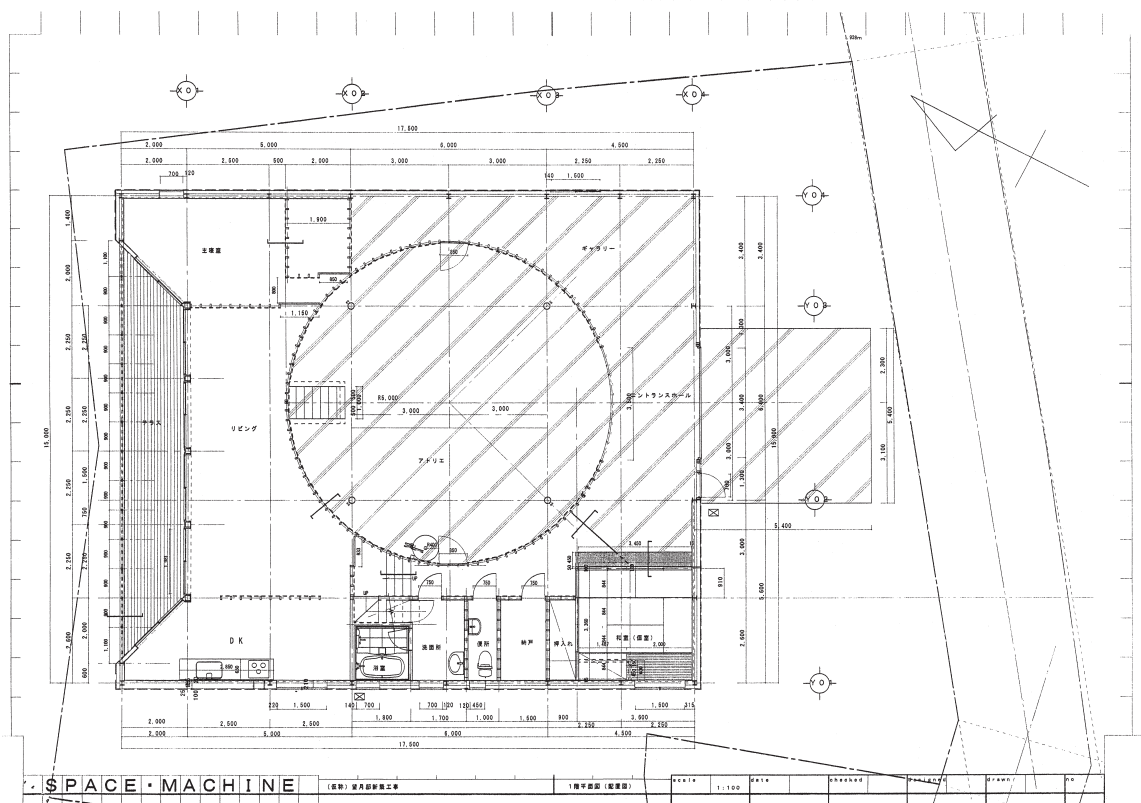


図1 平面図

める案に落ち着いたが、そこにデザイン上の大きな特徴が2点盛り込まれた。

1点は、制作スペースを円筒形に仕切ることである。北澤氏によれば、そのことで、直交する壁面で成立している、普通の室内空間が与える前後左右の意識が薄れ、新たな空間意識で制作できるという。また、建物内に大きな円柱を中心としたままとまりと、曲面の動感が発生するということがあった。かなりの冒険だが、最終的に了承した。最初の理由はとにかく、制作時の動線にストレスが少なく、作品に対する集約感も得られるのではという思いと、外部への防音効果が期待できそうなこと、そして一大事ながら遊び心も働いたからである(図1参照)。

2点目は、敷地の傾斜を利用した上にさらに段差をつけ、工房の搬入出扉の対面に下へ降りる扉を設ける案で、これによりLDKの下全面に高さ2m弱の空間が生じ、材料置き場や簡単な作業場として活用できる。加えて、窓のない円筒部分の風抜きも可能となる。彫刻家にはない、建築家ならではの造形感覚と感心させられた(図2参照)。

## VII. 地盤調査と<sup>さくせい</sup>鑿井工事

設計作業と並行して、現場の地質調査が行われ、一部地盤が弱いことが判明した。彫刻工房という特殊事情からしても、その改良を工程に加えねばならなかった。また、水道が整備されていない土地であるため、鑿井工事も予め行っている。土中に石が多く難航したが、20mを超える深い位置で水脈に当たり、良い水を得ることができた。

## VIII. 構造計算と建築確認

2004年夏前には、設計も細部まで及び、建材や設備等も具体化してきた。工房の空間を広く、柱のスパンも大きくとることから、木造では対応できずに鉄骨構造として、コンクリートの基礎も建物全面に打つこととなった。そこから、必要とされる構造計算を専門の事務所に依頼して、施工内容、方法等についても細かい指示を得た。

7月に設計の最終確認を行うとともに、施工業者の

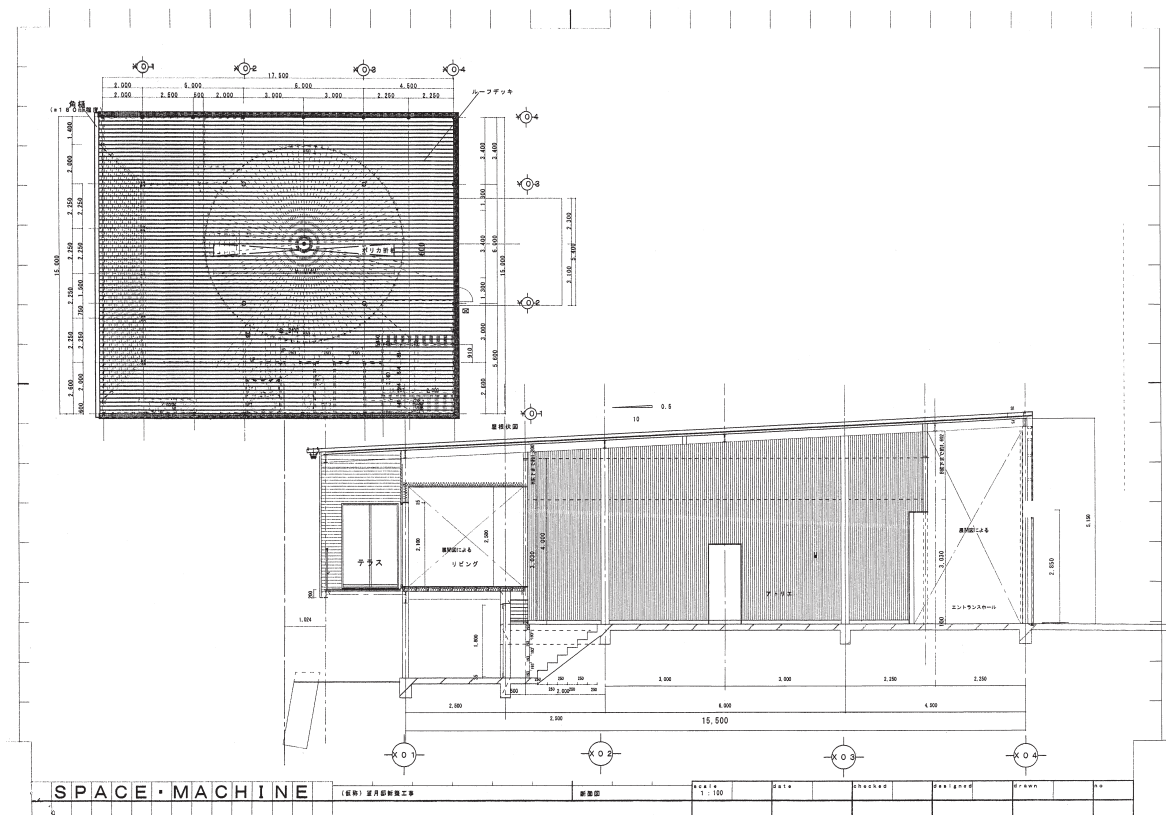


図2 断面図

選定に入り、数社検討の結果、比較的大手の工務店「渡辺富」(東京都新宿区)に決定した。8月に建築確認が下りるが、設計着手から既に半年が過ぎ、当初のスケジュールにより約2ヶ月遅れとなった。この後、さらに施工でも遅れが生じ、全体としては半年近く延びることとなる。

## IX. 施 工

9月に起工式を行い、実際の工事が始まるが、その過程は一般的なものであるので省略し、ここでは先に述べた工事の遅れの原因を箇条にまとめておく。

- (1) 先に述べた地盤改良工事にかなり日数がかかった。
- (2) 建築面積が80坪近くに及び、壁面も大きいので予想外に時間をとられた。
- (3) 例年に比べ、台風の上陸が多かった。
- (4) 中国の需要により、国内の鉄鋼が品薄、高値となった。

- (5) 10月の中越地震の影響で一部建材が不足した。
- (6) デザイン上、一般にはみられない工事(円筒部分や構造材のまま仕上げる等)が多く、手間取った。
- (7) 現場が遠方のため、移動時間のロスがあり、集中して作業が出来なかった。
- (8) 床暖房の採用を遅れて決定したために、工程が乱れた。
- (9) 工房の照明計画が不十分であったため、無駄な労力を費やした。

## X. 竣 工

年内完成の予定が年を越し、2005年3月末に便宜的な「引渡し」を行った後、監理者でもある北澤氏と工事責任者との三者による最終チェックは4月半ばとなった。その間に引越し(これも難事業であった)を開始し、電気関係の残工事も含め、全てが完了したのは5月末である。

その後、工房の整備にも時間がかかり、8月現在、



未だ万全の形で使用には至っていない。

## XI. 新工房の機能

最後に、この工房の建築物としての機能をまとめ、結論に代えたい。

まず面積に関して、作業スペースは円形ながら20坪分確保できた。しかし収蔵部分は今後の作品増加を踏まえると、やや不足と思われ、特に円形の壁との絡みで使い勝手が良いとはいえない。

天井高は平均約4.5mで、クレーンの吊りしろや高さのある作品への対応を考えた。円形の壁面も、設計原案の塩化ビニールからグラスファイバーへ変更し、遮音性、耐火性に配慮した。しかし、建物内での音もれ、防塵対策は不十分であり、また中心に向けて音が反響するので、作業上留意が必要となった。

床面に関しては、全面コンクリートで、土との境界に防湿シートを敷いているが、まだ乾燥が十分とはいえず、硬化剤を使用していないためほこりも立ちやすい。ただ、多くの作業場が冬、足元から冷えるといわ



写真1 工房外観



写真2 採光と照明

れているのに対し、多少実験的ではあるが、床暖房を埋設した。今後その効果に期待したい。

正面の搬入出扉は幅3m強、高さ3m弱で、敷居をほぼフラットにして、トラック等の出入りができ、大作にも対応できる。また、ガラス張りのアルミ折り戸を使用したため、シャッターに比べると、重量や開閉の手間が軽減され、南向きで昼は明るい。ただし夜間は中が丸見えなのと、夏場に虫が寄ってくるといったマイナスもある（写真1参照）。

採光に関しては、昔からアトリエは北窓といわれる。程良い光が安定して採れるからで、工場の鋸屋根も北側の垂直部分が天窓である。そこからこの工房も、北向き傾斜の屋根の中心部を、スリット状に半透明のポリカーボネート板にして、天窓代りにした。昼間はほぼ照明なしで作業ができ良好であるが、夏の晴れ間は光が強過ぎて暑い。

工房の照明は当初、メインになるものを設計者発案で、筆者がデザイン、制作の予定であったが、取り付けに関してトラブルが発生し頓挫した。その後、一般

的な水銀灯を考えたものの、長期的には光線の有害性の問題があり、結局、既設の配線ダクト4基に、ビーム球6灯を追加で設置した。壁面からの反射光を利用する設計案であったが、工房中央部がやや暗くなるため、今後灯数の増設などの改善が必要である（写真2参照）。

換気についても、粉塵やガスへの対策を含め気を配った。前述の作業場下側への掃出し扉のほかに、換気扇を東側壁面の天井近くと床面近くに各2基ずつ取り付けられている。ただ、こちらの希望位置とはやや異なるため、十分に機能するか疑問が残る。

（平成17年9月21日受付）  
（平成17年11月24日受理）